

WCS専用高糖分イネ「つきすずか」の栽培のポイント

農業革新支援担当 大宅秀史

(1) はじめに

「つきすずか」は、牛がほとんど消化できない籾の割合が少ない極短穂茎葉型（写真1）のホールクロップサイレージ（子実と茎葉を一体的に収穫し発酵させた飼料、以下WCS）専用イネの新品種です。茎葉の糖分含量や繊維消化性が高いため従来のWCS用イネより牛のエサとして適し、縞葉枯病抵抗性を持つので県北の米麦二毛作地帯でも栽培しやすい品種です。

この「つきすずか」について、農林水産省委託プロジェクト研究「収益力向上のための研究開発」（自給飼料分科会）の支援を受け、県内WCSイネの一般的な作型である麦あと栽培における栽培、収穫調製技術の手引きを作成しましたので、そのポイントを紹介します。

詳細については、農研機構のウェブサイトに掲載されている「高糖分高消化性イネホールクロップサイレージ生産・利用の手引き」を御確認ください。

http://www.naro.affrc.go.jp/publicity_report/publication/pamphlet/tech-pamph/134639.html

(2) 栽培のポイント

ア 専用収穫機や牧草収穫機械体系で収穫調製する場合は、6月下旬～7月初旬の晩植にすると草丈を抑制できます。

イ 麦あと栽培では、一般的な品種に比べ苗の伸長が早いため、育苗日数15～20日を目安に田植えすると、効率的な作業ができます。

ウ 追肥は草丈の伸長や穂部割合の増加につながるため、速効性肥料の基肥一発施肥体系とし、作付け初年度は窒素成分で8kg/10a、2年以上の連作ほ場では8～10kg/10aを目安に施用します（図1）。

エ カリウム要求量が多く、欠乏すると穂部割合の増大や収量低下を招くため、連作する場合は、完熟した牛ふん堆肥を2t/10a程度施用します（図2）。

オ 耐倒伏性の強い品種ですが、糊熟期以降に台風に遭遇すると挫折倒伏しやすいため、なるべく疎植にすると倒伏しにくくなります（図3）。

(3) 収穫調製のポイント

ア 稲体の水分が70%を切り、調製したサイレージから酪酸がほとんど検出されなくなる出穂期（9月中旬頃）から30日以降が収穫適期です（図4）。

イ 乳酸菌の増殖に必要な稲体の糖分含量は、出穂期から60日程度でピークに達し、その後も維持されるため（図5）、刈り遅れても良好なサイレージ調製が可能で、収穫期間を長く設定できます。

ウ 低温期のサイレージ調製となるため、「畜草2号」などの低温増殖性が高い乳酸菌を必ず添加します。



写真1 「つきすずか」の草姿と穂

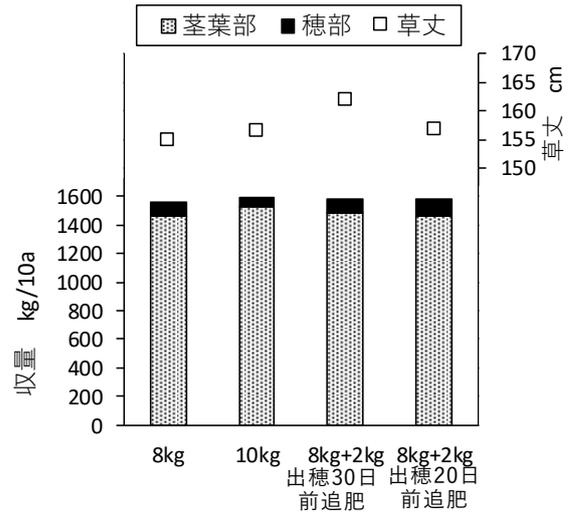


図1 施肥法による栽培形質の差

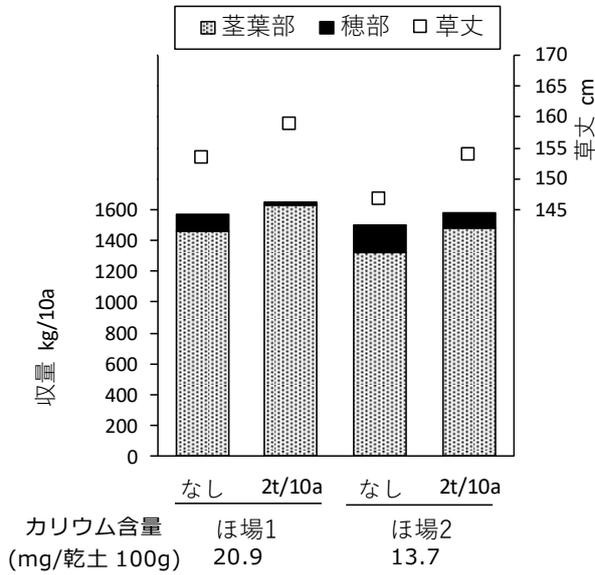


図2 連作圃場におけるカリウム含量と堆肥施用効果

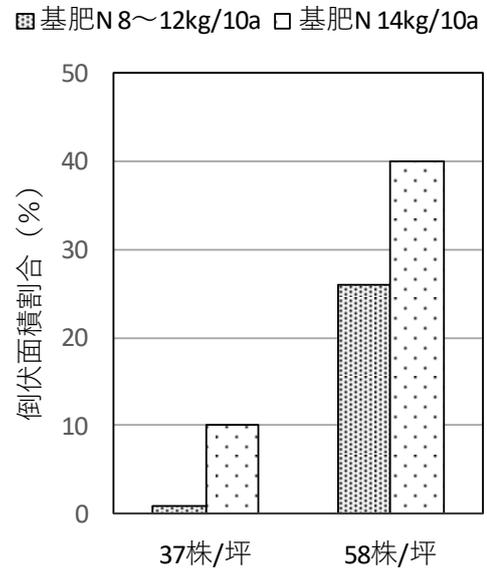


図3 栽植密度と倒伏面積割合

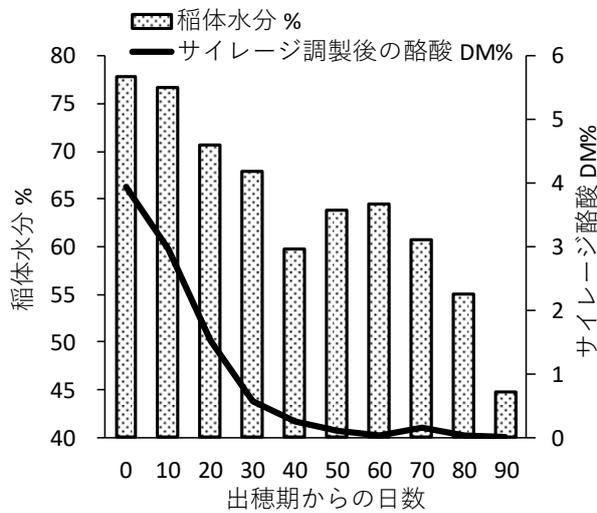


図4 稲体の水分率とサイレージ調製後の酪酸含有率

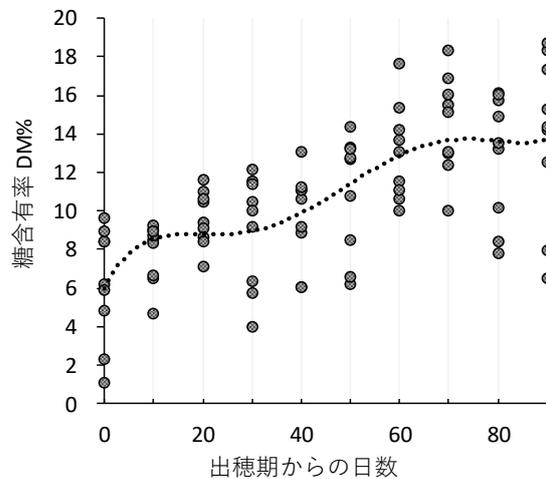


図5 稲体の糖含有率の推移